

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に働きかける 幼児の自由遊びの観察と評価

安久津 太一（岡山県立大学）

藪田弘美（美作大学）

前川真姫（環太平洋大学）

市川智之（兵庫教育大学人間発達教育専攻）

藤田 裕之（鳥取県智頭町立ちづ保育園主任保育士）

壽谷静香（福岡女子短期大学）

要旨：本研究は、鳥取県山間部に位置する八頭郡智頭町に唯一存在する認可保育園と認可外保育施設をフィールドに、自由遊びの観察と評価を行うことを目的とした。2つの園に在園する年長児合計49名の自由遊びの観察を行い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」との関連を踏まえ、一定の経験を有する保育者・研究者等が協働してナラティブを構成した。最終的に本研究では、コロンビア大学カストデロによる音楽活動のフロー観察法（FIMA）を援用し、各事例でどのようにフローが表出しているか、質的な側面の評価を行った。本研究から得られた結果として、それぞれの園での活動とあわせて2つの園における10の姿の出現の違い、フローの持続やその特徴が明らかにされた。

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿、幼児の自由遊び、観察、評価

はじめに

鳥取県八頭郡智頭町は鳥取県東南部の山間部に位置し、南と東はそれぞれ岡山県に隣接している。「慶長杉」と呼ばれる樹齢300年以上の人工林の存在も全国的に知られ、長い歴史と緑豊かな杉林が特徴となっている（智頭町ホームページ，2020）。

現在の智頭町の人口は6,900人（2019年10月1日時点）、保育園児数は約200人、小中学生は約400人である。2012年度に町内6校の小学校を1校に統合、2015年度に中学校を新築、2017年度に保育園2園を統合した新園舎（認可保育園）を建築するなど、子育て・教育環境の整備を図ってきた。智頭町は子育て世代である20～30歳の人

口が減少の一途をたどっている。子育て世帯の負担を軽減し、若者の移住・定住促進につなげるため、「子育てにやさしい町」として、第2子以降の保育料無償化、家庭で乳児の子育てをする保護者への給付金支給、病児保育制度の整備、町内の小中学校に通う児童生徒の給食費半額と通学費全額を補助するなど、子育て支援の拡充に力を入れている。

また、智頭町では、認可外保育施設が、2009年4月、全く新しいスタイルで子どもたちの成長を育む幼稚園として誕生した。「森のようちえん」として全国的にも有名な施設であり、自然の中で過ごすことを基

本に、大人が管理設定した環境ではなく、身の回りの自然に存在する、危険も含む多様な環境との接点を重視している（智頭町森のようちえんまるたんぼう、ホームページ、2020）。

本研究は、智頭町に唯一存在する認可保育園と認可外保育施設をフィールドとし、それぞれの園で展開される遊びを検証した。フィールドとして智頭町を設定した理由として、同一校区内には本研究のフィールドである2園、そして公立小学校1校のみが存在することが挙げられる。小さな町に2つの異なる特色を持った園のみが存在する例は日本国内には数少ない。なお、本研究の範囲外にはなるが、今後研究者等は、2つの園が相互に関わりながら保育の実践事例や視点を共有する研究を構想している。町で唯一の認可保育園と、全国的にも際立った特色を有する認可外保育施設の保育実践事例それぞれに検討を加えることが、今後の研究の土台構築に資すると同時に、本研究の範囲及び限界点となった。

本研究の制度的・理論的背景として以下が挙げられる。第一に、制度にまつわる背景である。文部科学省（2012）は、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」の報告書の中で、「幼児の発達や学びの個人差に留意しつつ、幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の姿を具体的にイメージして、日々の教育を行っていく必要がある」と指摘し、幼小接続の具体的な取り組みを進めていくことの重要性を示した。日本の幼児教育・保育の基準となる法令には「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園・保育要領」の3つがあり、

それらの改定が2017年に行われた。改定に伴い、小学校就学前の姿を想定した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が示された。10の姿とは、(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)数量・図形、文字等への関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現である。

第二に理論との連関及び理論的背景は以下の通りである。本研究では、2つの園で観察される保育実践事例を10の姿の出現に焦点化して分析すると共に、特にその評価において、コロンビア大学 Custodero (1998, 2005)及び Akutsu(2018)等による音楽活動におけるフロー観察法(Flow Indicators in Musical Activity, 以下 FIMA)を援用し検討を加えた。

フロー理論は、社会心理学者チクセントミハイが、人が現在の瞬間に夢中になって没頭している経験を体系化した理論である(Csikszentmihalyi, 1990; Nakamura, J & Csikszentmihalyi, M., 2009)。Custodero (1998, 2005)は、フロー理論を音楽教育分野の実践に応用し、FIMA を創発した(Custodero, 1998, 2005)。本論においては、音楽活動のFIMA を援用し、2つの園での活動時に園児がみせる、喜びや集中、遊びの発展、はっとした目の輝きなど、言葉では語られない代替的な評価の観点を取り入れながら検証作業を行った。具体的な観察指標とその解説を含む研究方法の記載は次項に委ねることとする。

本研究が設定した研究課題（リサーチ・クエスション）は以下の通りである。

1. それぞれの事例における 10 の姿の出現の仕方の違いはどのようなものか。
2. FIMA から読み取れるフローの質的な相違はどのようなものか。

方法

本研究のフィールドは、鳥取県八頭郡智頭町の同一校区内の、認可保育園と認可外保育施設である。研究対象児は、通園している年長児計 49 名と、それぞれの担任保育者 4 名とする。各園の園児数の内訳は、それぞれ認可保育園 41 名、認可外保育施設 8 名であった。

データ収集の方法は以下の通りである。2019 年 11 月に合計 2 日間、子どもの活動場面を、可動式のビデオカメラ 4 台を用いて記録した。観察場面は、認可保育園は園庭での場面、認可外保育施設は里山での場面とした。認可外保育施設には園舎や園庭がなく、里山や森が活動の場の中心となった。時間帯は、いずれも観察が 9:30~11:30 であった。

またインタビューは、観察実施日の午後の時間帯にそれぞれ行われた。主な質問項目として、日々の子どもたちの姿や 1 日の流れを踏まえた各映像に見る活動の位置付け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」の姿がどのように活動の中で表出し意識されているか、さらに遊びの発展や集中についてであった。なおインタビューは、Tobin 等 (2009) による *Preschools in Three Cultures* 法を参考とし、事例に即して行われた。ただし、本研究では、日常的に 2 つの園で、活動や事例を相互共有、視聴する機会が少ないこともあり、各保育園での事例のみを、それぞれの一定経験を有す

る保育者に視聴してもらいながら、インタビューが実施された。

最終的にインタビュー内容を踏まえ、撮影された映像の中から、それぞれの園の保育者及び研究者等が協働して、10 の姿の表出が最も顕著であり、かつ各園の日常的な活動の特色を最も示していることをクライテリアとして、精査・選別し、本研究でさらなる検討を加える場面を 2 つに絞った。

以上の経過を経て、認可保育施設では、砂場での自由遊びの場面、認可外保育施設では、森の散策中に遭遇した野いちごを摘む場面が選択された。

データ分析として、Barrett & Stauffer (2009)、安久津 (2016) 等の研究方法を参照し、ナラティブ研究の方法を採用した (安久津, 2016)。具体的には、研究者等が独立して複数回、さらに研究者等が協働してビデオを複数回視聴し、観察場面を解釈しつつナラティブを構成した。ナラティブ研究の方法論に関して藤原 (2007) はナラティブ研究を質的研究に位置づけ、語り手と聴き手、あるいは学習者と実践者の相互行為から構成される「経験の物語」と呼称している。すなわち、自分の日常の教育実践についての経験を語りつつ、相互行為の中で対話して解釈を深めて行くアプローチである (藤原, 2007)。関連して、Clandinin (2009) は、ナラティブ研究について、一人一人の学習者の体験や、個々の教師の音楽教育との関わり合いが、より応答的に、また人々の生活や文脈に即して内容の濃いストーリーを構成できると評価している (Clandinin, 2009)。

次に研究者等が協働して、観察された子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育って

ほしい10の姿」を手掛かりに考察するとともに、個々の「10の姿」の出現を記述した。その際、保育に一定の経験を有する筆者等3名が協働し、「10の姿」の出現に関して検討を加えた。複数回の研究者間での映像視聴と検討の場を持つと同時に、メール及び電話で随時調査内容及び進捗の確認が行われた。

さらに、観察された場面を、フローに照準を合わせてより仔細な検討を加えた。Custodero(2005)及び Akutsu (2018)が行った、FIMA を援用した質的研究に準じて、観察と記述が行われた。それぞれ課題の自己設定は、子どもが自ら課題を設定して取り組むこと、修正は、子どもが自分の誤りに気づき修正していること、慎重なジェスチャーは、無駄のない動きをしていること。課題の予期は、次に起こることを予測し、準備していること。発展は、現在の活動をさらに難しくし、発展させていること。延長は、活動終了の指示をしているのにも関わらず、継続して活動を行っていること。他者の存在の認識は、対象人物へ凝視したり、視線を移動させたりして、行動の同調を含めた人と人との関わり合いのことである。2名の研究者等が独立して映像を視聴し、FIMAに含まれる指標を援用しつつ、観察されたフローを特定した。独立した視聴の後で、協議をし、当てはまる指標を特定した。FIMAは、例えば幼児が遊んでいる途中に音楽が聴こえてきた場面で、遊びの手を止めて音が出ている方向を凝視したり、次第に音に合わせて体が動いたり、活動に夢中になっている様子を、課題の自己設定や発展と認識し、客観的な指標により読み取る手法である(Akutsu, 2018)。ま

た、例えば授業時間後も、幼児・児童が自ら活動に従事していれば、課題の延長とみなし、時間感覚が喪失するほど夢中で楽しんでいるため、フロー行動の表出とみなすことができる(Custodero, 2005)。なお、具体的な FIMA の指標は以下の通りである(表1)。

表1 フロー観察指標(Custodero, 2005)

指標	定義
設定	子どもが自ら目標や活動を設定している。
修正	子どもが自ら誤りに気がつき改善している
慎重	集中してコントロールされている、無駄のない所作。
予期	次の活動を予測したり準備したりしている状況。
発展	現在の活動をさらに難しく変化させている状況。
延長	活動終了の指示の後にも、なお活動に従事している。
他者	他者を凝視したり顔をそちらに向けたり等の行動や、身体の動きの同調も含め言語的・非言語的問わず人と人の関わり合いが確認される言動。

なお、本研究は、美作大学における倫理委員会の承認を得て行われた。研究の目的と内容を研究関係者、対象園児の保護者・保育者へ、説明書を用いて十分に説明し、同意を得るとともに、個人情報の保護等については下記の通り最大限の倫理的な配慮を行った。データ収集後、各園児名にID番号をつけ個人が同定できないようにした。データの分析等は全てID番号の下で行った。ビデオカメラで撮影した映像に関しても、撮影後の園児の名前を保育者に確認後ID化し、映像そのものはデータ入力後速やかに消去した。個人名とID番号

との対応表は紙媒体で、施設下のキャビネットに保管した。また、ID化された測定データはインターネットに接続されていないパソコンで保管した。研究終了時には、データを廃棄する。また、研究中に社会的・法律的に否とされた場合は、得られた情報は破棄する旨も明記された。

以下に認可保育園、認可外保育施設、それぞれでの観察を基にしたナラティブ、及び分析結果と考察を示す。

事例① 砂場遊びで料理する S（男児）

最初の事例は認可園における砂場遊びの場面のナラティブである。特に S に焦点をあてた。

砂場で料理を作って楽しむ S。S がつくる料理は、様々な内容に次々と変化していた。まずは、「カメムシご飯」と言っていて、近くにいたカメムシを砂の中に入れて混ぜていた。近くにいた友だちは、「カメムシが入ってるんだって。」「えー？」とカメムシは臭いという経験からか、びっくりした様子だったが、S は気にせず、料理を作っていた。

そして、カレーに見立てて「かまどで焼く」（煮る意味）と言い、「一時間ぐらい」と言いながら、スコップでかき混ぜて、ぐつぐつ煮る仕草を続けていた。その後、S は、今度は「膨らんできた」とまるでケーキを焼くように言った。そして出来上がりに「みんなで食べよう」と言った。S にとって、かまどは「煮たり焼いたりして料理を作るもの」という明確なイメージがあり、また、一人遊びの中でも、ご飯はみんなで食べたら美味しい、楽しいという S の思いが垣間見れた

瞬間だった。

料理を作り終わると、次は道路を作り始めた。「ダンプ入るかな？」と言いながら、ダンプに見立てた手押し車を砂場の穴の中に入れ、穴が小さいと思ったようで、シャベルで穴を掘りはじめた。そして、2 つのバケツに穴から掘り出した砂を入れ、バケツの取っ手と取っ手にシャベルを通して運ぶ姿が見られた。

10 の姿との連関

S の砂場における「料理ごっこ・道路づくり」という遊びの変遷をたどっていくと「豊かな感性と表現」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」の3つの要素が色濃くみられた。

料理ごっこの場面では、カレーをかまどで煮るという発想を起点に、「一時間煮る」という本児のつぶやきから、ぐつぐつ煮るとおいしいものができる（食べることができる）という生活経験に基づく知識が本児の中にあることが見受けられる。そして、「膨らむ」という言葉からカレーの完成への期待感をも表現しており、「みんなで食べよう」と一人で遊んでいながら、他者と喜びを分かち合う気持ちの表出もみられる。以上の事から、生活の中で感じた事を遊びに取り入れ、工夫しながら表現していく S の姿から、この遊びには「豊かな感性と表現」が含まれると捉えた。

道路づくりの場面では、地域で見た工事現場のダンプカーのイメージをもとに遊びが展開していった点で「社会生活との関わり」が含まれているとみなした。S は「はたらくくるま」が好きであり、休日に駐車しているダンプカーやユンボを見に行く

ほどである。

特に着目すべき点は、本児のバケツの運び方である。もしかしたら、Sの大好きな働く車がある工事現場で、作業員の方のバケツの運び方を見たのかもしれない。家や園にある働く車の図鑑でそのような写真を見たのかもしれない。いずれにしても、Sの遊びは、地域で見た経験に影響されており、「社会生活との関わり」が鮮明に見られた。併せて、バケツの運び方のこだわりは、工事のリアルさを追求するという試行錯誤が見られることから、「思考力の芽生え」も挙げておきたい。

フロー観察

以下がフロー観察の指標に照らし合わせて見る園児の姿の特徴である。課題の自己設定は、保育者が指示せずとも砂場遊びが選択され、さらに複数の見たて遊びが始まっていたことから顕著であった。また課題の自己修正及び慎重なジェスチャーは、例えばSが砂をバケツに入れ、米をとぐ所作をしている際に、砂がバケツからはみ出すのを防ぐためにスコップや道具を使って表面を均していたところに見出せる。課題は次第に発展しており、スコップを使い横にできた砂の山の表面を均す行動に至っていた。さらにバケツやリヤカーを増やして砂を入れ機敏に動き、終了時には非常に満足げに腰に手を当てて周囲を見渡していた。最後にはスコップに出来上がった砂が満たされたバケツ2個を引っ掛けて持ち上げ、「よっこらしょ」と言って保育者の方を一瞬見ていた。一人で、もくもくと遊んでいる時間も長い。が、随時Sは他の園児と関わっており、他者の存在の意識は強

いと言える。保育者の声がけ等はなく、大人の存在の意識は低いものの、時折保育者を見ていたことから、若干意識をしていたと見て取れる。実に30分以上一つの遊びに集中しており、時間感覚の喪失も顕著であった。

事例② 散策中の野イチゴ摘み

次の事例は、認可外保育施設で観察された野イチゴ摘みの場面である。以下にナラティブを示す。特に最初に水路を見つけて活動を始めた2児（女児）に着眼した内容である。

散策中に2児が路肩に水路を見つけ、降りられる場所を見つけた。2児は自らリュックを置いて水路に降りて行った。「見て、ほら、こっちくればいいじゃん」水路のトンネルをくぐって行った。「めっちゃある～」野イチゴを発見した。「みんなもいっしょにおりるんだー。」といいあいながら、2児に続いてくる子どももいた。他児も、「たしかにいっぱいあるなー」と言いながらさらに多くの園児が降りて行った。その様子を見守る子もいた。2児「やっぱしたはいいねー」と言いながら野イチゴを凝視している。続く子も次々リュックを下ろして下に行った。他児が「したからでもみえやすい」というと、さらに続く子もリュックを下ろして下に降りていた。他児「カバンもおいてったほうがよかったー」と言いつつ、全員で野イチゴ摘みの活動が始まった。腰をかがめ、自らビニール袋を出して、野イチゴを摘んで入れている。保育者が「おいしいね」と声をかけ食べると、2児も含め食べてみる子も現

れた。袋に黙々と摘んでは入れていく子や、より多くの野イチゴを採るために枝ごと折る子など、それぞれの方法で採取していた。保育者は始終、「おいしいね」と声がけしながら野イチゴを食べていた。2児はくるぶしまで水がある水路に入りながら下から採っていたが、他の園児は上に戻って木と同じ高さから採る等、様々な工夫をしていた。

10の姿との連関

本事例を通しては、野イチゴを摘むという目標に向かって、足場の悪いところでバランスを取ろうとするなど「健康な心と体」の要素が多くある点、30分近く、様々な方法や場所を変えつつ工夫をしながら野イチゴ摘みをする点で「自立心」、また様々な場所の野イチゴを発見したり、それに驚嘆の声を上げている点で「自然との関わり・生命尊重」の要素が色濃い点を確認しておく。

2児の「野イチゴ摘み」あそびの場の変遷と場面に合った調整の様子を辿っていくと、特に「思考力の芽生え」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」の要素が見られた。なお一点確認しておきたいのが、当該児らにとってこの場所が初めてなのか、この場での野イチゴ摘み経験があるのかどうかはわからない。ただ経験の有無にかかわらず、その場でいくつかの気づきがあったと捉え、興味深く感じた点を挙げていきたい。

野イチゴ摘みを十分にした後、2児が水路に着目し、階段から水路に降りた点に注目したい。2児は、ただ水路に降りるのではなく、安全に降りることのできる段差

状の位置から水路に降りる。これは自分の行動への見通しをもち、安全に行動しようとしている点で「健康な心と体」の要素が確認できるのではないだろうか。また水路に降りた際にカバンが邪魔になると感じたのか、自らカバンを下ろす姿に注目したい。これは誰から言われるでもなく（もしかしたら以前に大人に言われた経験があるのかも知れない、いずれにしても自らの経験に基づいて行動しているのでは）、自ら必要感を得て、行動している。これを10の姿に当てはめるのであれば、物の性質を予想し工夫している点で「思考力の芽生え」であろうか。加えて、例えば「邪魔になるからカバンを下ろしなさい」等と大人に言われやすい事象、いわゆる約束事になりやすい事象にもかかわらず、自らの判断で必要感を感じて自然とカバンを下ろしている姿から「道徳性・規範意識の芽生え」とも捉えることができるかも知れない。また2児が、誰に言うでもない様子で「見て、ほら、こっちくればいいじゃん」「みんなもいっしょにおりるんだー」と伝えている点にも注目したい。自分の気づきを押し付けるのではなく、自らの驚きのままに言葉で伝えている点で「言葉による伝え合い」の芽を読み取ることはできないだろうか。さらに水路に降りることにしても、カバンを下ろすことにしても、誰が指示する訳でもなく、自然と周囲にその行動・行為が伝播していつている。これは野イチゴもあり水路もありというこの環境下で、友だち同士の気づきや発信をキャッチし合い、集団の行動が変化していく点で、「社会生活との関わり」における社会性の部分の芽を読み取ることができるのではないかと考える。

フロー観察

課題の設定に関しては、結果的に一緒に散歩していた園児たち全員が、特に保育者の介入なく野イチゴ摘みに従事しており、明確な課題の自己設定と認識することができる。課題の自己修正や慎重なジェスチャーにおいては、例えば園児は最初右手のみ、片手で摘んでいたが、左手で枝を抑えながら摘むようになるなど工夫しており、顕著であった。課題の発展は、例えば食べてみる、ビニール袋に集める、枝ごと折って採る等、次第に発展していった。仲間の存在は、一緒にいた全園児が最終的に同じ活動をしていることもあり、相互に視線を送りつつ野イチゴを摘んだり食べたりしていたところに見て取ることができる。大人の存在の意識は保育者からの「おいしいね」等の声かけなどが頻繁であった。活動自体は30分ほど続き、その間水路に全員入り、水や落ち葉で遊びつつ、野イチゴから離れ、散歩が続き次の活動に移って行った。

総括

本論では、対象とする2園の保育方針や規模等が異なることを前提として踏まえた上で、10の姿の出現とフローに焦点をあてて、両者の特徴把握を行った。以下研究課題と呼応させながら本論の総括を示す。第一の研究課題は、活動の相違と10の姿の出現の様相の違いであった。活動全般を概観すると、同じ遊びでこそあるが、前者が園庭での見立て遊びであるのに対し、後者はイチゴを摘むという実体験に即した活動になっていた。この点は、根本的に園舎や園庭での遊びと自然の中で展開される遊びや活動との違いであると思われる。園

舎や園庭では見立て遊びが展開しやすく、一方では森の中では遭遇する自然との関わりの中で、現実的な課題に対処する、異なる活動の展開になることが言えるだろう。いずれも「10の姿」と密接につながりを意識することはできるものの、活動の相違がより顕著であるという結果となった。

具体的な姿として、認可保育園の園児たちにおいては、「豊かな感性と表現」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」が顕著であった。一方、認可外保育施設の園児たちは、「健康な心と体」や「自然との関わり・生命尊重」が、認可保育園よりも多く観察されることが明らかになった。自然の中で多くの時間を過ごすことで、園児たちは自然とふれ合い、体全体を使って遊ぶことで、これらの姿が育っていくものと考えられる。

フローの観点からは、認可保育園において、多様で、かつ持続性も高いフローが観察された。最初は料理ごっこであり、料理の種類が変化しつつ、後半は工事現場ごっこに展開していたが、Sは始終砂場遊びに徹し、1時間近く活動が持続していた。一方、認可外保育施設では野イチゴを摘むという行為以上の発展はなく、摘み方を工夫したり、リュックを置いて動きやすい体制で活動に従事したりする等、現実的な状況への対処の中で、必要に迫られての個々の工夫に極限されていた。活動時間も1時間があっという間に過ぎる園庭での砂場遊びに対して、森の中の活動では、30分で野イチゴを見つけ、摘んだり食べたりしつつ、次の散歩のルートに戻っており、フローの観点では前者において顕著な傾向性が明らかにされた。

おわりに

本論では鳥取県八頭郡智頭町に唯一存在する認可保育園と認可外保育施設をフィールドに、遊びの観察と評価を行った。2つの園に在園する年長児合計 49 名の遊びの観察、さらにビデオを素材としたインタビューを行い、それぞれの園での活動の相違とあわせて10の姿の出現の違い、フローの持続やその特徴を明らかにした。園舎、園庭で繰り広げられる遊びと、森での遊びの対照が顕著であった。前者は想像的な遊びや自然にできた小さなグループでの共同が顕著で、一つの砂場遊びにしても遊びの種類も多彩な一方で、後者は現実的な本物の森の自然との関わりそのものが遊びとして展開されていた。本論では各1例ずつの評価を行ったが、今後本研究で収集したほか事例に関しても詳細な検討を加えたい。

引用・参考文献

- Akutsu, T. (2017). Observable flow experience in a two-year-old Japanese child's violin playing. *Music Education Research*. (Accepted on 18, November, 2017).
- Barrett, M. S., & Stauffer, S. (2009). *Narrative inquiry in music education: Troubling certainty*. Dordrecht, the Netherlands: Springer.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow: the psychology of optimal experience*. NY:

Harper and Row.

- Custodero, L. A. (1998) Observing flow in young children's music learning, *General Music Today*, 12(1), 21-27.
- Custodero, L. A. (2005) Observable Indicators of Flow Experience: A Developmental Perspective on Musical Engagement in Young Children from Infancy to School Age. *Music Education Research*, 7(2), 185-209.
- Nakamura, J. & Csikszentmihalyi, M. (2009). Flow theory and research. In S. Lopez & C.R. Snyder, (Eds), *Oxford Handbook of positive psychology*. NY: Oxford University Press.
- Tobin, J., Hsueh, Y., & Karasawa, M. (2009). *Preschools in three cultures revisited*. IN: The University of Chicago Press.
- 安久津太一(2016)「子ども一人一人の学びを保障するツールとしてのフロー観察」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 14, 6-14.
- 藤原顕 (2007)「はじめての質的研究法-教育・学習編」東京図書
- 文部科学省 (2012) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告書 (2012/11/11) https://www.mext.go.jp/component/b_menushingi/toushin : 2020 年 1 月 23 日閲

Abstract

Observing and assessing children's free play by employing the structure of *10 Sugata*

Taichi Akutsu (Okayama Prefectural University)

Hiromi Yabuta (Mimasaka University)

Maki Maekawa (International Pacific University)

Tomoyuki Ichikawa (Hyogo University of Teacher Education,
Human Development Education)

Hiroyuki Fujita (Chizu town Chizu Nursery School)

Shizuka Sutani (Fukuoka Women's University)

This study investigates children's free play in two contrasting settings: a nursery and kindergarten in Chizu-cho in Tottori Prefecture. The former is a public nursery and the latter is a privately owned kindergarten that is well-known for its *forest kindergarten*. First, a team of researchers observed free play in the two facilities, and videotaped them. By using the videos as a cue, we conducted semi-structured interviews. We particularly focused on how the new Japanese course of Kindergarten called *10 sugata*, ten targeted abilities and skills that we want infants to cultivate by the end of their childhood, was implemented, and how the teachers recognize and consider the children's play and the element of *10 sugata*. Next, the study conducted a flow assessment by employing Custodero's (1998 & 2005) Flow Assessment in Children's Musical Activities (FIMA). The study concludes that a different environment fosters children's free play differently. The public nursery respects expressive quality, thinking skills and contextual influences, while the privately owned kindergarten emphasizes nurturing the healthy minds and body, and respect of life existence in and through realistic experiences. As for flow assessment, the former facilitated more variety and lengthened flow derived by the spontaneous-imaginary play.

Keywords : Early Childhood Education, Children's Free Play, *10 Sugata*, Flow Assessment and Observation